

# 三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第16号  
2018年4月

## これからも魅力的な事業を

公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団

理事長 内田 治



公益財団法人三鷹市  
スポーツと文化財団  
は、心身共に健やかな  
市民生活の形成と豊かな  
地域社会の発展に寄与するため、芸術文化の提供と芸術文化活動の奨励・支援、スポーツ活動及び生涯学習活動の推進・支援を行っている公益財団法人です。「三鷹市山本有三記念館」の管理運営につきましては、これまでも指定管理者として、年間を通じて企画展などの展示事業、朗読コンサートやスケッチコンテストなどの教育普及事業を実施し、多くの方にご来館いただいております。

さらに、記念館のリニューアルオープンを機に、今年度よりこれまでの事業に加え、子どもたちの読書環境の充実に尽力した山本有三の意思を尊重し、再び多くの子どもたちに記念館を訪れて欲しいとの願いから「おはなし会」や、記念館の魅力をさらに高め、より多くの方にご来館いただけけるよう午後の時間帯に施設内で気軽に聴くことのできる「アフタヌーン・ミニコンサート」などの実施についても検討しています。

また、施設の管理においても、大正時代に建てられた洋館の魅力と、庭園の四季折々の花と緑を皆さまにお楽しみいただけますよう維持管理に努めてまいります。

これからも、三鷹市と共に指定管理者として、より質の高い市民サービスを目指し、多くの方にご来館いただけるよう魅力的な事業を提供してまいります。

## 三鷹市山本有三記念館

### リニューアルオープンを迎えて



三鷹市長 清原 康子

「三鷹市山本有三記念館」は、文化勲章受章者及び三鷹市名誉市民であり、小説や戯曲の作家、参議院議員、そして少国民文庫の主宰者などとして幅広く活躍した山本有三の業績を顕彰するため、前身である「有三青少年文庫」の実績を基礎に、平成8（1996）年11月3日に開館しました。

この工事を実施するに当たり、三鷹市では初の試みとなる「クラウドファンディング（インターネットを利用した寄付の募集）」を実施させていただき、市内外の多くの皆様からの貴重なご寄付をいただきました。

本記念館の価値を評価し、維持保全に協働していただきましたことに、心から感謝申し上げます。

このたび、幅広い皆様の温かいご理解とご支援により、改修工事が終了し、リニューアルオープンの日を迎えることができました。

三鷹市は、今後とも、作家として、文化人として多大な功績を残された山本有三を顕彰し、文化財である建造物の深い魅力についても多くの方々に堪能していただけますように努力してまいります。

どうぞ、「三鷹市山本有三記念館」について、皆様の引き続きのご注目とご来館、多様な事業へのご参加を心からお願いいたします。

特別掲載

三鷹市山本有三記念館 リユースリアルオープン記念企画展

# 山本有三、作家の遍歴

平成30年9月2日(日)まで



湯河原の家、門前の石垣にて 昭和40年頃

「波」(昭和3年)、「女の一生」(昭和7~8年)、「真実一路」(昭和10年)、そして「路傍の石」(昭和12年)。

山本有三「1887~1974」作品の印象的な特色の一つとして、登場人物が波瀾万丈な運命をたどる長編小説が挙げられます。「山本有三」と聞いて、「路傍の石」の主人公、苦難に立ち向かう吾一少年の姿を思い浮かべる方も多いのではないでしようか。有三の長編小説は、起伏に富んだ筋立てと平易な文章によって構成され、ともすれば大衆的とさえ評される場合もありますが、言い換えればそれだけ人々の心に浸透しやすい作品となっています。そのため、長編小説家としての印象が際立つているのではないでしょうか。

しかし、有三が長編小説を集中的に手掛けた時期は、昭和初期から10年代にかけてと、その人生に比すれば、さほど長い期間ではありません。あまり知られていませんが、明治・大正・昭和という3つの時代を生きた有三は、その時代ごとに作家にはとどまらない、多彩な活動をした人物です。

戦後は参議院議員へと転身を遂げ、創作からはほとんど遠ざかります。作家としては沈潜の時期にあたりますが、議員としては文化委員長・文部委員長を歴任し、祝日法や文化財保護法などの制定に携わるなど、精力的に活動しました。また、日本国憲法の口語化や、当用漢字の制定に携わったのも戦後のことです。昭和28(1953)年に議員の任期を終えると、終生の

もともと有三は、小説家としてではなく、劇作家として作家人生を歩み出しています。明治の末年、24歳で処女作の戯曲「穴」(明治44年)を発表し、社会派戯曲とも言うべき「生命の冠」や「嬰児殺し」(大正9年)といった作品によって注目を集めました。本格的な長編小説の執筆を開始するのは、昭和に差し掛かつてから。「波」や「路傍の石」などの新聞連載によって押しも押されぬ国民的作家として名を馳せたのは、昭和戦前期のことです。

地となる湯河原へ転居し、古代史などの研究に没頭しています。

作家としての長い空白期間を経て、「濁流」の連載に取りかかったのは、最晩年にあたる昭和48年のことでした。ですが、「濁流」の完結を待たずして、翌年、有三は86歳で没しています。

数々の遍歴を経つつ長い人生を歩んできた有三は、「濁流」をどのような小説として残すつもりだったのでしょうか。大作となる予感を秘めたまま未完となつた「濁流」は、有三の人生の総括として位置づけられるはずのものだったのかもしれません。

本展では、それぞれの時代に積み重ねた有三の「遍歴」に焦点を当て、晩年の執筆活動へのよう結実しようとしていたのかを探ります。

# 三鷹市山本有三記念館リニューアルオープンにあたって —記念館のこれまでとこれから—

玉川上水のほとりに佇む洋館、三鷹市山本有三記念館。たたず

山本有三が、かつて家族とともに住まつた場所です。住んでいたのは昭和11(1936)年から21年までのおよそ10年間。決して長い期間とは言えませんが、記念館には、有三が家族と暮らした当時の面影が色濃く残っています。

有三が三鷹に居をかまえたのは、49歳の頃でした。当時の有三は、流行作家としての忙しさに体調を崩し、また大所帯を抱えていたために、環境

がよく創作に集中できる静かで大きな家を求め、そんなときに三鷹の洋館を紹介され、見学に出かけた有三は、一目でこの家を気に入つたと言います。



作家として、は寡作な有三ですが、三鷹時代には代表作である小説「路傍の石」や戯曲

「米百俵」を執筆しています。また、執筆以外にも、有三の人柄をよくあらわす「ミタカ少国民文庫」の開設に取り組んでいます。この取り組みは、戦時下にあって読む本の不足する子どもたちのために、邸宅の一部と蔵書を開放するというもの。戦局の悪化にともない、わずか1年半で閉鎖を余儀なくされますが、文庫の開設は、当時の日本における数少ない明るい話題として、多くの新聞や雑誌に取り上げられました。

戦後、三鷹の有三邸は、当時としてはめずらしい洋式設備を整えた洋館であつたために、進駐軍からの接收を余儀なくされます。三鷹の地を離れることとなつた有三は、接收解除された後も三鷹へ戻ることはありませんでした。しかし、有三は、未来の青少年の育成のために役立ててほしいという想いから、昭和31年、この土地と洋館を東京都へ寄贈しました。

その後、旧有三邸は、地域の人々に愛される図書施設、「有三青少年文庫」として残り続けることとなりました。そして、平成6(1994)年7月に三鷹市の文化財に指定され、平成8年11月3日、名誉市民である有三の生涯と作品を紹介するとともに、建物を保存・活用することを目的とした三鷹市

山本有三記念館を開館したのです。

山本有三邸、「有三青少年文庫」、そして三鷹市山本有三記念館へ。現在の姿に至るまで、あまたの変容をとげた三鷹の洋館ですが、三鷹に住まつたころの有三の想いは、変わらずに脈々と受け継がれています。

平成30年4月 三鷹市山本有三記念館

## 山本有三「ミタカの思い出」

私がミタカ村に越したのは、二・二六事件の直後であった。その翌年に日支事変がおこり、その後に、ミタカは町になった。

太平洋戦争も、敗戦もミタカの家で迎えた。

そういう意味で、ミタカは思い出の深い土地である。私はここで、「新編路傍の石」を書き、「戦争とふたりの婦人」を書き、「米百俵」を書いた。新かなづかい、当用漢字の制定、新憲法の口語化にたずさわったのも、この時代のことである。

しかし、敗戦の結果、私は家を接收され、懐しいミタカを立ちのこなければならないことになつた。私はしばらく他人の家に間借りをしたり、大森に移つたりして、今ではカナガワ県に住んでいる。ミタカが市に昇格したのは、その間のことである。ことしは、その十五周年にあたるというが、もし、家を接收されなかつたら、私も市民として、ミタカにとどまつたことであろう。

ミタカに住んでいたのは、十一年ほどだが、ミタカは私にとって忘れない土地である。

(「三鷹市報」昭和40年11月3日)



## 展示室Eが新しくなりました



リニューアルオープンに合わせ、山本有三記念館2階の展示室Eが、子ども向け展示室として生まれ変わりました。「子どもたちに本を」との想いから〈ミタカ少国民文庫〉を開設し、子どもたちの読書環境の充実に尽力した山本有三。その有三の想いを受け継ぎ、展示室Eでは、新たに有三についてのわかりやすい解説パネルや、子どもたちが自由に手に取り、読むことのできる絵本・児童向け書籍を用意しています。

子どもたちが本に親しむきっかけとなれば幸いです。



〈有三青少年文庫〉閲覧室

### ▶▶▶ 本の紹介

#### 吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』

著者の吉野源三郎は、山本有三が編纂した児童向け叢書「日本少国民文庫」の編集主任を務めあげた人物。『君たちはどう生きるか』は、「日本少国民文庫」叢書のうちの最後の一冊として、昭和12(1937)年に刊行されました。

主人公コペル君の精神的成长を通して人生の指針を説く同著はロングセラーとなり、現在に至るまで名著として読み継がれています。



岩波書店 昭和57年11月 / マガジンハウス 平成29年8月 / マガジンハウス 平成29年8月

※ここにご紹介した本は展示室にてお読みいただけます。

#### 日本少国民文庫

『日本少国民文庫』は山本有三が編纂した児童向けの教養叢書で、昭和10年から昭和12年にかけて全16巻が刊行されました。有三がこの叢書を企図した背景には、自分の子どもが本を読みたがる年齢になった時、良心的な児童書がないと感じたことがあります。また満州事変、五・一五事件を経て、次第に戦争へと向かう暗い時代の中で、時勢に負けないヒューマニズムを子どもたちに伝えなければならないという、有三の強い熱意からでもありました。

構想・編集にあたっては新潮社の4階に編集室が設けられ、編集方針などは全て有三に委ねるという形で作業が進められました。吉野源三郎を筆頭に石井桃子、吉田甲子太郎が編集実務に奔走した他、独文学者高橋健二、英文学者中野好夫、作家阿部知二、劇作家岸田國士、物理学者で歌人の石原純らが編集会議に出席していました。叢書が完成した後も時折三鷹の有三邸に集っては時局について語り合うなど、有三と編集者たちの交流は続きました。

編集・発行

#### 三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27

TEL 0422-42-6233

ホームページ

<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

入館料：300円(20名以上の団体200円)

\*中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとバス」利用者は無料

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分

JR中央線「京王井の頭線」「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分